

地の譜第の有力首長層から選ばれたとすれば、京都・仲津郡内で古墳時代終末期の大型古墳群や古代寺院（廃寺）の所在地とその周辺が郡司の出身地・郡衙所在地の有力候補地として浮かびあがろう。

六 国々を結ぶ交通路

七道の幹線

中央・地方の政治組織の整備に伴って、中央と地方とを結びつける交通路と交通の制度も次第に整備されていった。大化の改新の詔のその二に曰く「…駅馬・伝馬を置く…」とあるが、しかしその制度が整備・完成されたのは「大宝令」の制定のころから八世紀の終わりのころであるといわれている。交通路（駅路）は、都中心に七道（山陽・東海・東山・南海・西海・山陰・北陸）の幹線で諸国の国府と結び、さらに支路が設けられた。

七道はその重要度と官使往来の頻度等から大路・中路・小路に分けられたが、それは次のようになっている。

- 大路…山陽道とそれに続く大宰府まで
- 中路…東海道・東山道
- 小路…南海道・西海道・山陰道・北陸道

各道には原則的に三〇里（約一六キロメートル）ごとに駅家が置かれ、駅馬が配備された。しかし土地の状況によって駅家間の距離は増減された。また支路にも駅家・駅馬が置かれた。

駅馬・伝馬

駅の運営は駅長によって行われたが、駅路の規模により駅馬の数が決められた。駅の運営費用は駅の近くに設けられた駅田からの収穫（駅種）が充てられた。伝馬は郡ごとに五疋

が置かれ、伝馬長が運営に当たった。そして駅馬・伝馬ともに定められた公使や官吏により主として中央政府からの伝達・通信・連絡に、地方からは報告・連絡のために利用された。

西海道と豊前国

西海道では駅路は大宰府中心に設けられた（第13図参照）。『延喜式』（兵部省）には全国の所在駅名と駅・伝馬疋数が記されているが、それによると西海道では九国と壱岐島に九七駅・駅馬六〇五疋、伝馬一六五疋が置かれている。そのうちで豊前国では次にあげる駅家・駅馬が置かれていた。

第7表 豊前国の駅と駅馬数

国名	駅数	駅馬数	駅・駅馬数
豊前国	九	六十五	社崎・到津 各十五疋 田河・多米・刈田・築城・下毛・宇佐・安覆 各五疋

豊前国府と駅路の関係では、西海道の東路が到津駅（北九州市小倉北区）で分岐して刈田駅（苅田町）から京都峠を通過して多米駅に至り、ここでは大宰府から東へ伏見駅（穂波郡）―網別駅（嘉麻郡）―田河駅へと延びてきた支路と交わって東へ向かい豊前国府の南辺に達する。

現在まで豊前国内の駅家跡は発見されていないが、特に身近な多米駅の所在地も特定されていない。駅路は航空写真や地図上で平野部の畦畔にその痕跡を確認できるが、山地・河川・湖沼などで方向が変わるほかはほぼ一直線に走っている。駅路の往来は官人・官使の駅馬によるものほか、農民の租・調の大宰府への運搬路などとしても利用された。その往路は荷物があるので二日、復路は一日とされた。